加陽

千代尼發句集

石州
岩田屋
藩閥

後ろや夢さへ（そ）歌の詞の
よ記るの用りもあまれや花の表
初宮や高ゝ野ゝ（うゝ）
家裾の高も桂ゝ（ゝ）やそそ（そ）め
かすゝ（ゝ）ぬそ初高も本ゝ（ゝ）庭の
松井や垂ゝ（ゝ）ゝめら新日の
井も起ゝ（く）吉吹の八次の

朱　始

福ゝや御除の袴より袋にも
鶯のあそび手をなれるゝ初日ふ

布袋の賛

初空や袋も山のわらいより

初霞

まゝ顔の元へたもち初うぐひす
木のもとに八重のことゝのり初うぐひす

地にはふ多八多なりをりうぐひす

文蓋のうら書

初うぐひすや二日の夕ぐれ

若水

ゆうゆうや流るゝうちに云々今年
ゆゆしや二葉に咲花も　世東
ゆゆしや迷ふ邪ふ鶯の新

一句案

五案やとろろハ花のとろろく
第案の第五句ハ春る　とも

人日

七草や清正にかゝ合ふ中とも
道者とうまでのうちの若菜摘
人あゝ小雪も消るやうの野の

若菜つゝ生ふよう花の通ひろ
七草のひゝ紀のあるかの音
仕ようなゝ言ひ新ほ多摘
子の跡を雪のうけ中る若菜哉
花まて八雪ふむ之を多菜うか
ひといかゝも摘出ひ之るなゝうか
七くさや雪之の日の地小つう決

七夕や あまれて とぶぬ 雨 有

一いろのあまりわ白き若葉うか

七夕や 都のみをとる日数

あくるや 京 青 そよ 更

風のくもきふまく入ぬうれ

七夕や 雲と 拂へ ふれてな

白 日の 香 追 もあり 若葉 畑

山 雲 ふ の 雨 若葉 掛

露の面 質

人 言 と 露 ふ ふ て 若葉 ら な

梅

梅 咲 や 何 う 咲 て も 雲 と 雨

梅 う 雨 や 風 の あ ん ん 木 に も う

梅 の 花 咲 日 雲 本 こ う 糸 あ り

むめうかやゐもの水出るより
梅うゝや戸の罪音無き春の雨
咲るふりを撰ばさや梅のえか

文蔵のゝ書

梅の月沼の浮ゝ二見うの邨
梅うゝやてゝ[illegible]の[illegible]
梅うゝや[illegible]ゝ[illegible]ひに行[illegible]

俳を思ふて鶯をゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ人[illegible]ゝ梅の花

返牌

梅花や松の[illegible]ゝ秋乃春
梅花仙[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]梅の花
梅うゝや[illegible]ゝ花の[illegible]

梅咲や[illegible]ふ[illegible]ぬ　杉
梅うや　何ぞく　咲くすく　言　女

大恵の絵賛

[illegible]れ和てや　梅の花

絵賛の章

[illegible]や　書[illegible]けるも　梅花
梅うふ　法[illegible]　夕さ[illegible]

露ひとつ　仰ぐ[illegible]　梅の花

嘗

うくひすや　又ひとなる[illegible]
嘗[illegible]あれ　交れ　和言うな
黄露や　[illegible]　富士の雪
うくひすや　[illegible]の井の裏
嘗やう　野　[illegible]

うくひすや和吉ふかく[illegible]
[illegible]の井も
うくひすや梅の宮人[illegible]
[illegible]の井
うくひすをゝしも庶させて和吉ふ

柳

[illegible]一路ひ柳

[illegible]の梅[illegible]
[illegible]地の果一なれのこ
青柳を何ぶよ植ても静か
[illegible]ふ解ふ[illegible]の柳
[illegible]て八文柳ふ[illegible]柳
青柳やとち乃世話をあの言
柳う[illegible]ふ[illegible]こく

おもてうら　柳さく柳

手形新花見てはの柳哉

柳をあつてきもふもすぐぬ柳哉

えびすまの賀

釣竿の糸吹そめし　柳まて

八十の賀

たゝかに長一時　柳　多

案名のつゝしまて

見新うちふりはせれて仕舞柳哉

の生まれ人

青柳の釣糸とゆる新西瓜うる

表紙

見まさ新茶なるゝ小表の表

表紙やうたくゝ　なるわ斗

春雨や素乃笑ひ二節江餘り
素雨にぬれて蝶もあるかな

蝶

蝶〳〵や何を爰見て羽をつゝい
梦ぶの蝶もゐるや空房り
蝶れ〳〵爰いて出て裏うな
ぶんぼうやれ〳〵さまの蝶の梦

蝶〳〵やをなこの道乃あとやさ文
ひの花の香吹あるる排蝶れ
蝶〳〵や稚の〳〵房る　佐山
あるるの法會
をゝまくて梦なる蝶も法の場而
猫窓清雲

妻たてぬ時のわかれそねこの　丁い

妬見分て雪りまよふや猫の恋

浅ゆきハや幾筋も志くもとの道

風巾霞山吹

吹くと花よ貌引し　風巾

鳥ハ声に路先けふ霞　可前

山吹や柳にもつめのよ空む　二源

山吹の浪とけかく　露や　水北橋

祖師五百年遠忌法会二章

奈られ合ふてひとつにぬるみや湖も

す衆の世に寺の流とぬるゝ嬉りけり

桜

何しおふハ男ありけり花川さくら

和をふや中まく　桜井にハ気の孝

四のくらくらゐて散日うか
とうえ手も花ゐ行ゆや吉野山
ゆふ来波八人のあとにの和さく
雁うえ乱んて出くふはつさく
見て戻る人よハ遠和さく
むせハれて蝶も屋敷や京はくら
ぬれぬいよ〳〵名〳〵　和樹

滝を滝宮ハ花をういて出くら
月の秋のさくら雁ら蝶の紅葉ハ
仏ら出れて猪く表の山さく
潜るとて利ハせゆやもやま樹
喫煙を宮うあさゆるさくら
たんざくの風とあつふはく屋ふ
花をさくらまてるの宮ハ消ふ

はる新人も麻布なるや和ゆくら
姫うの人の元日のあしややま 櫻
花もうやの宮花を至えうり
てさいれくまて撫えつ櫻
ゆうう押てのうや山 櫻
見ぬわを見れより姫 櫻花
奉納

こうちかを 島の仕事や神の花
画賛
通くさう鶯も 無させぬ花の所
桃花

冥土の笑ひ目うう 桃の花
えれかえかわうぬ道やまくの花
より野うう者も房奈や桃のえる

里のふの叺まゝ白きの花
桃咲や幾交るり行あらう
湯屋も色より出よりり桃の色
まくさくつ名を絵やふ江
蓮生見まする人よ
桃の色目小あすいまりて蓮生見ル
方の罪てあれ家を家ちく桃のえか

汐干

青松のりふを雑丈ーふ干ふか
拾ふ和ふ前くるり姫干 潟
海士のふり見るぶ世くを亜汐干
蝶くのまいて居る あふ干ル

雛

雛もちや雛のうりも悪ーらを

指ひてもふてえうひゝなる
ゝもゝひの月ゝや雛のたい 江

雛月

宛の明れはもれ一 暁月

あほうゝ花やそれて、なるて八人

れふ事れもものの八ゝあほうゝ月

鄙花や鳥ゝ帝ゝ梅をうう

あほう鶴やれのゝもれ行あ

ゆもさして鳥ゝ人や猪

鄙花やうゝりぬ歌より匿

花のものをゝつもやあほうゝ

雑

ゝ帝て云いうゝの花て鶯

ゝくさや尾の歌八名雑ゝの夢

耳をひき手てもあるべうきの夢
隠れ屋さびもあれなり雑子のこ
雲雀
明はてし川辺よりなる雲雀哉
野路八重の雲のうしのふ雲雀哉
てふてふ蝶蝶とまとと雲雀哉
菜ひらの　うれひひらうれ

ありて八十をとうて鳴ひらう　小
あれ野八うてはも高て雲雀　小
西行賛
多あうや雲雀の笠も地小菊　先
蕉
雲雀　未てあゆこてあ郡や舟の柳
西賛

[illegible]

蛙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義仲

蛙鳴て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

送[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松花

いとゝ原野に出るとゝて松の花
あつらさ川よ

こむらゝてゝる月をなつかん松の花
踏ゝ分ると　ぬきて

鳴り　世ゝや　うて玄の琴
深の夕八幡の月や　玄の　音

下葉や所ゝ花ひらゝ　ちきゝり
送ゝ

見送れて墓原に成り花ふゝり
蘇ゝ花

数の花ゝふて連ゝ連ゝ　ゝ花
雲の姿ゝさかるや　ゝ　の花
松ゝ　ゝのゝゝや　ゝ　ゝ　ゝ花

まつ風も小夢とあるや夜北花
あそびいんのあるるや姫ごの花
野うそく新ひさやさそ蔵の色

東衣

花の春うらうらりんをてや東衣
錦ぬるや鶯もそうり鶯
つくぬるやはあて岩屋のあそろ

錦ぬるやまつ新くにらもあり
桜拾の山うはもあるや文　衣
花ごさの自小あつまるや文衣

般

ぬうり丸雛をぬうりそや東衣
二月三日の添うぬ新拾の　名
陽ぬの

日数をへて卯月の花盛り

卯花

うの花ハ日をもちてうつり

卯の花や垣根の笹の下し

うの花の雪よりつく茎葉うれ

牡丹

頃ろより蕾あやかれ牡丹哉

まゝ中に添て名もあらむ牡丹

蝶くれ更数庭あまるうんうれ

指折ハ数へもかれ牡丹　ゞ

京国姫の賛

ゆゝしの雫に臨も新るる牡丹うれ

牡丹

あの　水れ

かさつてさ

洋の名をまつ人あり　杜若

行春のあとをしたはるやうきつゝ

をゝしの句のあるうらう

春の　うゝそれのこゝろうり　杜若

潮仏

潮仏や書の巻紙もあるゝめ

数珠つゝの音をさけてや花菖蒲

花菖蒲

晩鐘、春もちらぬ　うゝ

日の暮の道はのゝる後ゝ　うな

春雨や知らぬむらゝのもの　ぬ

行しゝ子

もゝ　時よ夢ハさもしを行ゝ子

保敦る

洗さハ夢人ゝてゝかんことゝ
分入て風さくさえて 孫敬 多

筆子若井

井のそのやそのの日のうち 元之 至

鈴子

若井と数て毛色のた
風毎に手ふを吹出ぬや子井

若井の風八日ゝ雨ゝ
つゝけや花の年又遠入る時

婦人の遊惜

それ口の孔雀の花きゝの毛

部公

語の夢はり年や春ゝ次
ものゝ言ゝ少入数や春ゝ次

あしの葉八重にしてくれなゐ　時雨

西賀

音をいくよ雲井ふむ中ふ郭公
延あの家多もあ原　子規

風人又学ぶ人ふ
本ゝの雪梅てゝ是に於　宇

あのさ川

道ゝゝ　やゝゝ　きに
きぬくのあゝに春な　子規

男さゝうれぬものゝをほゝきに
唯是ゝく松の夢やゝゝきに
おもひ切ゝくゝ向ゝゝきに
唯もゝ新道なゝゝ　時雨
子規門ゝの口もゝゝく　是

百合

姫申りやあら乳れて筆とあちこち向
ゑめゆりや姿をとそろあやう

水鶏

水音へ水ともうてて　水鶏　朱

蛍

下雷よ君足口生れをや蛍蛍

あの色やと色々蛍を五兵衛
川もうり雷もあられく蛍うな

芭蕉

花と針の心留まる　茨　の事

蕎麦

塩ひてもぬるく色のあるあやあり
音はうり質先のふあやえんか

沢りあるうちハ君をぬ菖蒲小
風ふりもをのをのを新あや光

五月小

短歌乃うゝみとゝをやあ月夜

田植

まゝ神のもをハぬも　田植小
ほをまをりも遠くゝを思ふく〻

思ふ人恨あゝ色有れを思をのゝ
ふををうり男をををうか田植ら南
まてあワのれ揺ゝ家連ゝ有
夕顔
ゆふ新を新ゝゝとゝ家豊ら南
夕のをとハ女をの肌の見ゆる時
おをのをとハ　わのうくれをうふく

あいさつ

ゆゝしの富や栗の実あくさ花

あつさ日や指も色さしぬる花　富

海苔の這入てゆるる　六畑

出はれて小雨こゝの水ありの露

袋花の花ゆゝ花ゆゝ

山路や出もとの日暮れの花

累

あぶの目をこゝ思ふ人れぬ思ふ

姫蜜のうそふ色新あたら

吸殻を散捕りしる黒さう角

暮て見れば本蕎のあつさ

二浮子藤元

うきくさや蝶のちからに押へても

山頬を登りし轂くや蜘の糸

涼草に家る柏の緑涼しさの花

藤やとうとゝくれ咲とこう

藤の花や濡れてりあさてかなゝ　仰

氷室

涼しさや氷室の雫くゝの梨

ぬれらうて流の九ツかずや氷鉢

蝉

初蝉や風なきも日のある日のく

せみの音やかゝる気根に（あり）あのく

夏風もきのふにて蝉のこゑ

納涼

松の葉こよ々流く先をかく涼かり

源さま、橋くらの吟あらう
源氏や 評れ合る者ども
さ〜ゝ八庵うねる 松の琴
寿〜〜やあるかるる出て 遊雪の音
新坊の春よたくる源の郎
東海北陸源氏の郎

遠別

遠とその道〜叶ふもの源
源さや 砌いろ行房り
八十乃賀
源ぢや そこに八十年の松の琴
ひよるの賀
子雲の器よ寿も連ふや 世ふ源
たうさり

[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]の人々[illegible]

あいさつ[illegible]

白雨[illegible]の白[illegible]山[illegible]

ゆう[illegible]の道[illegible]

夕[illegible]

[illegible]山峯

暇にさいる[illegible]

松風を[illegible]

あいさつ

[illegible]ひ[illegible]れいにあつく[illegible]

送別

何[illegible]服のうちを[illegible]

清[illegible]

山のまそ鏡くもりなく清みかに
青くて底くて船のゆき清みかに

醤の猿よ鈴さ〳〵〳〵

道くさもゆのうきくさ清みかに
知さいたりもつまそ鏡くもりかに
行さきて又ゆかう道清みかう
ゆあくれハ猪ひめゆき清みかに

を道を来て月はなれ清みかか
月ふもゆ岩ゆくの清みかう
船のうくゝ猿ちの人〳〵
木くゝをや清みよ新のえ四ゆ道
を道よゆ元年ゆ元年ゆ一〇月ゆ
船ふゆ三〇あかさとをくゝ清みに

ゆ如年号

清みづにかくらむと表もあらうらう

生駒の月

初竿の糸よさハ秋やえの月

初秋

数奇の波のほよ姫ぎや今銀の秋

秋こゝやきのふむらう有の 信

これとそと何もえん ぬれそ銀の秋

萩の葉ぬきの元のうやけさの 秋

琴の音の我にかゝるやきさのあき

秋にゝやはしめて貴のあらう白

秋きも 風巻も中 ゆうう

初秋やまくらいわの 吉

えゝあきこへまるぬ銀の色

かさひゝの袖うハくゝり萩の吉

萩墨

萩の葉のこゝろあれまとを吹て春
秋の秋へ立ぬれてそるあれさに
鶯の弓八ゝつゝて春る秋墨ゝか
きめてのあつさ川ゝか
文月や元よりまたあくひうあと
文月の返てよ落る一葉この分

七夕

萩と穂よ南部やあのあそひうり
かゝ合やんゝて行雲のあ
かさゝきやおれの橋無をさと
鈴ゝや星のワゝられをあらゝ白
夕就と寄るやくくそゝりまゝり
かゝ合ゝ八月入まて無ゆの涼

鶯も秋ふるさと苔の八月　うま

笠新

雲の花やまつ竹火の新もゆり

あきうりや明蓙るきうり　次

新新や新しき色の八花と花

あきのうち蜘のいとまも咲うりう

蓙の花や木陰のあそろ〳〵き

あきうほそその月うり遠て毎仕色

蓙千ものやとのつるうと蓙に咲

あさうりや微色花のへらひ

新かほや裾色月色市蓙の花

あさのうりや蓙仕る花蓙色川

新のうりや二八の花高うと蓙のうり

新のほふ新瓶とうれく蓙もゆ

稲妻

いかばかり心猪の変ゆられうり
稲妻や何くれるしを引けて行
いるつまの袴とぬるもやれのと

菊の花　花野

蝶しの月のとゝらぬ花野うる
画賛二章

芦刈るゝ凡の拾ひや拾小　丸
芦の紫ふすぶるゝ屋とゝうゝ
文臺のうゝ書
うゝあ北穂り乱れて一見　暁
千種見の見ゆて
波のうくゝ秋の暁ゆう千種見
道ゆこ章

日和く遠き藩の手まくら
下冷を吟ずるめよとちの　くさ
月見送歌に月の雛されぬ老の野か
そふ日てもを歌程や菜の花
秋風のいふまくれ方の尾花うな
州の戸やうまれた新地も咲
西園賛

雑子のつま隠し亜笠落うか
晩鐘うり鶏鳴う沉む尾花哉
桔梗の花咲時
川岩の苔をもうて花ゆ
あいつさ川
千秋をまへむ生ひて哉の庵
秋の野や花てある草なぬ菜

ぬるとのゝ音とのうらうらの虫鞍
鶏頭や赤ゝ一つ雲もなく天高
鶏頭やまこものもゝハ根ゝ枯
刈萩の人
落ちこゑたる霧に色ぬれる萩の色

秋風　虫

木のゝもゝくさ落るる音や秋の風

けふ秋とあの新たふ鶏頭の
虫の音ふんも雲雀啼萩の
花枝の笠ふ星と時やさゝゝ
虫の音や蹄ゝとまりて庵の
長夜

名月の人よ押合ふの音の新
名月や雲ふつもる水の音

名月や一つの野末ふみと咲あり

名月やかりてもくらぬのうら

名月やそつうの春いろうり

名りや白きうりも紙に書の言

吹達の耳矢ふやうふの月

名りや暇子を乗のうを友行

画賛

きぬぐは月にも青てゆかみ

名りや子を乗のくゆと世じ

何名てもくつくつる月ぶ

名月や音と蔵くくの色を浴せ

月ぶみを陰ろうの影や女遊

名りや一音と暮ぬる高あう

つぼの花や名なて帰さ次

人中を隠べる歌の文　月はん[illegible]
名りあ[illegible]やあそこ[illegible]
[illegible]うゝ[illegible]ゝむこ[illegible]月はん[illegible]
めい月やあかるゝものゝ[illegible]行あう
四月や何[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の稲
名りや[illegible]
ゝ町の新あら[illegible]の月

名りや[illegible]
あゝゝ[illegible]
仇の[illegible]
名りやそのゝゝ[illegible]
[illegible]四[illegible]
名りや[illegible]酒[illegible]名の[illegible]
十六[illegible]

いさよいや今あそこみてゐる男　雁

十六夜さ、唯一つく人のうらうら

いさよいや いさよいと云果ぬうちの

十六夜の雲とこはいや荒嵐

いさよいの雲や恥かく人とあり

和屋

さうやうや過ぐるうきて和さうう

和下や雨〳〵下ゆきあい年

和かりや山〳〵紅れハ野ゝ色

はつ屋や夢あるを和のとこそ色

えつ下や見捨れた花を者の哀

鶉

世人の月の矣鶉かうの

夢〳〵れても秋をわすれぬ鶉小

後もうけの こ 新うの事

六源園

雪のうち色もこのやうもなしなるる菊

菊

菓の香り 極ふ日八なり 菊の花

菓物やきふ日とりんのうの跡

咲花をいくらか拾てふの菓

菓咲て除の香八菓より勝る色

公園や紅さいたひの面白ふ

菓咲てりふまるくの世話忘れ色

菓々物や花の作菓雲斗さ

さくの香や菓小押合ふと皆あり

新くの面白すと花菓の花

菓物や芝々ふらりと八日の夜

きぶんてうり見て生むものと菓の花
ちゝ菓や　ちきいといふもいへるに
気に加て菓の外あれ　菓他へ
七夕の菓　桔梗咲ては　あらうらう
ちゝ菓や　月小咲ふと　八月も八月
ふとも　ちゝ　かれふ　ちゝや　菓の花

後月

新坊も出て八頃ふく后の　月
ちゝ　ちゝれた　袖も濡の　後の月
のちの月　坊あて　せそ　れいうけ
とり　坊　須和　梨のやもめや　後月
ちゝ　ちゝ　ものハかゝして　後の月
山　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝやのちの月

新坊

この秋の月はかくれ　あとの風

三夏惟心

百生や夢一生のふるうつり

若木を何くれやねや程定へ

一瓢菴うつく

ゆくすゑを白ふよ　ねるる鶴の年

花やあふう　鶴いろと長鶴

行春の夢も出るや始くへうう

紅葉ふ

本紅葉（かけ）うつ生る日の雪る紅葉は

ゆふくれを金ふう紅をて紅葉

おくハうり少るあるる紅葉ハ

色不知くハ生ものや雪紅葉

鶴ふう

雪かゝぬ宵ハうもあれ和もじ

鹿

水の色ふゝかりてや麻の葉
タゝれを引あゆめてそーうのさゝ
牡丹雪ハ月ーうーうのさゝ

雁

音添ゆて雁ーうつまる徒ゝ

栗山ゝ
の枕さたもるかーーう申
風の目ハ余所の仕ゝと写ゝ
鴨正善
鴨たゝいや与所の目ゝれ善ゝ
立志
百ゝ歩のそのの日も鴨のゆゝ有

暮秋

行燈や消えくるたれ八重垣

山代の温泉にて

温泉九山や秋の夕霧八今宵の月

行秋や ひとり文をも書れの夢

時雨

降さしてまくる幾度の初しぐれ

柳うゑ宗匠をつくれ

日の暮れ遠八湯く雲や初時雨

日の中小唯の雲あり初しぐれ

夕月の宵の雨あるる乱れ雲

牡丹の枯葉を行くる高く迫

世ならくは白きものとて忘れ雪

初しぐれ風も雨もあれ来る通り

まさ屏のまふをあり和しくれ
京へ出さく目小たり雲や和
のをもの人も見る遠しくれの雨
田ハもとの地ケ蔵仏や和は夏
きのくふ河さハ点のしくれ

帰花

文しのハ白ハの表かと咲く花

表の夜の表ん て咲やかへり花
麻さ表の別深をいつ咲く花
咲くと果ハうるうあり咲く花

蔵表

見るうちハ月の新へる蔵ハ
蔵表まて地のあとや指出の月
あのうつふ表と和流ハ蔵楽ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

根ハ切ゐ接ぎしあり　柘尾花

安元

もゝちゝもゝ[illegible]まゝせて　柘尾花

大柏川　[illegible]

通くさの[illegible]ハ[illegible]　大柏川

咲ものゝ　柏をときたる　[illegible]

子のちゝ[illegible]　四月　柏ハ[illegible]　[illegible]月

風　小六月

ふらしやさくに蔦紅葉の月

俳さるの三日月の八の字　小六月

紙衣史徒

浩之吉と曙もあり紙衣かな

尼ゝるしは

紙衣を浩ふものひまなくて史徒

石州
吉屋
蔵書

三ヨ八
セヨケイ